

◎香川で生まれ、郷土の発展に尽くした人々

産業経済の分野で活躍した人々

向山周慶 1764（延享3）～1819（文政2）年 白砂糖の精製に成功 医師

東かがわ市湊みなとに生まれる。16才で、平賀源内ひらがげんないや高松の医者池田玄丈げんしょうの研究を受け継ぎ、白砂糖の精製に成功した。

四国遍路へんろの途中病気でたおれた薩摩さつまの関良助せきりょうすけを助け、その礼として、サトウキビの苗を手に入れた。30年におよぶ苦心のすえ、1790年に「雪のように白くて味も良い。舶来品はくらいひんよりもすぐれている」という評判ひょうばんの高い白砂糖をつくり出し、大阪市場で「讃岐わさんぼんの和三盆」として知られた。

影山甚右衛門 1855（安政2）～1937（昭和12）年 讃岐鉄道会社を作る 実業家

多度津町たつしに生まれる。東京で見た新橋～横浜間を走る汽車を見て、鉄道の開業を計画する。明治22年、当時、多度津・丸亀は金毘羅参りこんびらまいの玄関港であったことから、多度津から琴平までの11.3キロメートル、多度津から丸亀までの2.8キロメートルの鉄道を開通させ、讃岐鉄道株式会社を設立した。この後、四国の鉄道網は讃岐鉄道が元になって拡張された。

『景山甚右衛門翁伝』景山翁遺徳顕彰会/編 景山翁遺徳顕彰会 1968



多度津町より

政治の分野で活躍した人々

大久保謙之丞 1849（嘉永2）～1891（明治24）年 四国新道に生涯をかける 事業家・政治家

三野郡財田上村（今の財田町）に生まれる。四国新道の建設をはじめ、讃岐鉄道設置、多度津港改築など、数多くの事業を成功させた。なかでも有名なのが、丸亀から多度津、阿波池田を経て高知にいたる全長約280キロメートルの四国新道建設である。1886（明治19）年に着工し、1894（明治27）年に完成したが、謙之丞は、工事の完成を見ることなく、42歳の若さで亡くなった。



財田町より

芸術の分野で活躍した人々

玉楮象谷 1806～1869年 讃岐漆器の父 漆工芸家

高松市たかまつに生まれる。推黒ついきく、象谷塗ぞうこくぬり、蒔醬きんまなどのすぐれた技術を編み出し、今日の讃岐漆芸の基礎を築いた。

象谷は、父の指導を受け、彫刻や塗りに秀でた力を発揮した。20才の頃に京都に行き、中国の宋（11世紀ごろ）や元（14世紀ごろ）の時代の彫漆技法を研究。1830年、25才の時に、高松に帰り、高松藩主松平頼恕まつだいらよりひろ、頼胤よりたねにつかえ、数々の作品を製作した。作品では、「推朱ついでしゆ牡丹ぼたん図ず鼓箱つづみばこ」や「蒔醬料紙箱きんまりようしぼこ」が有名で、重要美術品として現在も保存されている。

『玉楮象谷』開館15周年記念 高松市美術館/編 高松市美術館 2004.2



高松市中央公園



「新田藤太郎作品集」
高松市立美術館 瀬尾充より

につた とうたろう
新田藤太郎 1888 (明治22) ~ 1980 (昭和55) 年 彫刻家

三野郡莊内村積 (今の詫間町積) に生まれる。高松工芸学校 (今の高松工芸高等学校) を経て、東京美術学校 (今の東京芸術大学) に学ぶ。在学中に文展・帝展に入選。1932 (昭和7) 年には審査員となる。戦後は、高松に帰り制作に打ち込み、香川県の文化・芸術の向上に力を入れ、県下の美術界に貢献した。作品には、「菊池寛像」, 「玉楮象谷像」 (高松市中央公園) などがある。

◎香川で生まれ、郷土や日本の発展に尽くした人々

学術教育の分野で活躍した人々



くう かい
空海 774 (宝亀5) ~ 835 (承和3) 年 讃岐が生んだ平安時代初期の僧

多度郡屏風浦 (今の善通寺市) に生まれる。弘法大師ともよばれる。

804年、31才の時、第16次遣唐使船に留学生をして乗り、危険な船旅の中で唐 (今の中国) の長安に渡り、真言密教を学んで806年に帰国する。816年、43才の時、高野山 (和歌山県) に金剛峯寺を建て、真言宗を開く。

空海は、才能に優れ、書の大家として「日本三筆」の一人にあげられている。また、満濃池を直したり、日本最初の庶民の学校「綜芸種智院」を開き学問を広めるなど、数多くの業績があげられる。



丸亀城西小学校横

いのうえ つうじょ
井上 通女 1660 (万治3) ~ 1738 (元文3) 年 江戸時代の女流文学者

丸亀藩の儒学者井上儀右衛門の長女として生まれる。少女時代に書いた『処女賦』は、儒教の教えをもとに女子の心がけをまとめたもので、「年少の女子博士」ともてはやされる。

22才の時、江戸にまねかれ、丸亀藩主京極高豊の母養性院に仕える。江戸へ向かう時の『東海紀行』, 江戸での生活を書いた『江戸日記』, 養性院の死を悲しみながら帰国するまでの『帰家日記』は、通女三日記として有名。

当時の代表的な学者であった新井白石などと交わり、学問を深める。5代将軍綱吉に儒学を講義。その才能と努力に「讃岐の紫式部」ともいわれる。



『井上通女全集』 井上通女全集修訂委員会/編 香川県立丸亀高等学校同窓会 1973



平賀源内先生顕彰会より

ひらが げんない
平賀源内 1728 (享保3) ~ 1779 (安永8) 年 江戸時代の発明家・科学者・劇作家

寒川郡志度浦 (今のさぬき市志度) に生まれる。19才で高松藩の御薬係になる。25才の春、長崎へ行き、本草学 (薬学、植物学) と医学を勉強した。その後、江戸へと出かけ、オランダ語の勉強とともに本格的な本草学の研究に取り組み、学者として認められた。

医学、植物学をはじめ、物理学、化学、動物学、鉱物学、地理学から油絵、焼き物の技術、芝居の脚本とすべての面で人並み外れた才能をみせた。1776年にエレキテルを復元して、人々を驚かせた。51才でなくなるまで、奇抜なアイデアを生かし様々な仕事を成し遂げた。



『大江戸アイデアマン 平賀源内の一生 日本史の目』 中井信彦/著 さ・え・ら書房 1982.10
『平賀源内 世界伝記文庫』 今井誉次郎/著 国土社 1981



栗山記念館蔵

しばの りつざん
柴野栗山 1736 (元文1) ~1807 (文化4) 年 寛政の三博士の一人

三木郡牟礼村 (今の牟礼町宮北) に生まれる。子どもの頃から学問が好きで、13~17才まで後藤芝山ごとうしざんについて学んだ。礼儀も正しく、模範生もはんせいであった。18才で江戸に出て昌平黉しょうへいこうに入學し、儒学を学んだ。33才で京都に移り住、後藤芝山の先生である高橋図南たかはしとなんから国学を学んだ。

栗山の名はやがて幕府にも伝わり、1788年、53才で幕府に仕え、学問を教えるだけでなく、政治や外交問題などに意見を求められるほどになった。

「寛政の三博士」と呼ばれた栗山は、現在も、学問の神様として尊敬されている。

『一步・そしてまた一步 マンガ柴野栗山』 てつきのこ/作画 牟礼町教育委員会 1991.12



小川太一郎氏より

やすい
保井コノ 1880 (明治13) ~1971 (昭和46) 年 我が国初の女性理学博士

三本松村 (今の東かがわ市三本松) に生まれる。幼い頃から賢明で、香川師範学校から東京女子高等師範学校 (今のお茶の水女子大学) に進み、生物学を専攻して、母校の助教授となる。日本女性として最初に外国の学術誌に論文を発表した。

また、アメリカに留学し、帰国後、1927年に石炭の研究で日本女性としてはじめての理学博士となった。

『20世紀のすてきな女性たち 3 マリー・キュリー 保井コノ レイチェル・カーソン 柳澤桂子』 岩崎書店 2000.4
『おおちの三賢人』 大内町/編 大内町 1986



菊池寛記念館より

きくち かん
菊池 寛 1888 (明治21) ~1948 (昭和23) 年 文学界で幅広く活躍した小説家

香川郡高松七番町 (今の高松市天神前四) に生まれる。四番丁尋常小学校 (今の四番丁小学校) に入学する。早くから読書に興味を持ち、高松中学校 (今の高松高等学校) 時代、家の近くに図書館ができたときには、一番に閲覧券えつらんけんを買い、毎日通い、2万冊の本のほとんどを読んだと言われる。

小説を書くことのほか、1923年文藝春秋社を創設し、雑誌『文藝春秋』を創刊したり、1935 (昭和10) 年には、芥川賞・直木賞を創設し、新人作家の育成に尽力する。

『逸話に生きる菊池寛』 文藝春秋/編 文藝春秋 1989



三本松高校より

なんばら しげる
南原 繁 1889 (明治22) ~1974 (昭和49) 年 学問の自由を守った教育者

大川郡相生村 (今の東かがわ市相生) に生まれる。県立大川中学校 (今の三本松高等学校) を卒業後、第一高等学校を経て今の東京大学法学部へと進む。卒業後、1921 (大正10) 年、東京大学で政治学を教えた。1945 (昭和20) 年12月から東京大学の総長となる。

総理大臣吉田茂と、戦後の後始末について考え方がくいちがったが、学問の自由と平和を求める考え方をはっきりと言い、そのころの人々を大変感動させた。

『我が望 少年 南原繁』 岩本三夫/著 山口書店 1985



壺井栄文学館より

つばい さかえ
壺井 栄 1899 (明治32) ~1967 (昭和42) 年 日本中を感動させた小説家

しょうずぐんさかてむら うちのみ さかて
小豆郡坂手村 (今の内海町坂手) に生まれる。1925 (大正14) 年に上京し、小豆島出身の詩人壺井繁治と結婚。39才のときに書いた、『大根の葉』が認められ、プロレタリア文学運動に参加した。以後『柿の木のある家』、『母のない子と子のない母と』、『二十四の瞳』などの名作を発表した。1964 (昭和42) 年内海町名誉町民となる。

『わたしの愛した子どもたち 二十四の瞳・壺井栄物語』 滝いく子/著 労働旬報社 1995.8



三木町より

三木 茂 みき しげる 1901（明治34）～1974（昭和49）年 生きた化石を発見した植物学者

三木町に生まれる。長年化石植物の研究を続けていたが、1941（昭和16）年、セコイアの化石とされるものの中に、ちがう形のものを見つけ、これを「メタセコイア」と名付けて発表した。その4年後、中国に生えている植物が、三木博士の発表したものと同じであることが分かり、「生きている化石」として世界的に有名になる。

戦後、アメリカで育てられた苗がわが国に伝えられ、県内の学校や公園にもこの木がよく植えられた。博士の出身校である三木中学校には、メタセコイアの庭が造られている。



『三木茂博士の足跡 メタセコイアの命名者』 斎藤清明/著 三木茂博士生誕100周年記念事業委員会 2001.12

政治の分野で活躍した人々

大平正芳記念財団より
（国会答弁中の総理）

大平正芳 おおひら まさよし 1910（明治43）～1980（昭和55）年 香川が生んだ大政治家 県人初の総理大臣

三豊郡和田村（今の豊浜町）に生まれる。1952（昭和27）年の第25回総選挙で、香川2区から立候補して当選し、政治家となった。外務大臣、大蔵大臣などの重要なポストを努めた後、1978（昭和53）年、香川県出身者として初の総理大臣に選ばれた。

1980（昭和55）年、選挙運動中、急性心不全のため亡くなる。

郷土のためには、香川用水、瀬戸大橋の建設、香川医科大学（今の香川大学医学部）の開校などに力をつくし、名誉県民第一号となった。



『大平正芳 人と思想』 大平正芳記念財団 1990.6

スポーツ・芸術の分野で活躍した人々

丸亀市猪熊弦一郎
現代美術館より

猪熊弦一郎 いのくま げんいちろう 1902（明治35）～1993（平成5）年 自由で明るい世界を描いた画家

高松市中新町に生まれる。1924（大正13）年、県立丸亀中学校（今の丸亀高等学校）を卒業。上京して、本郷洋画研究所に学び、東京美術学校（今の東京芸術大学）西洋画科に入学する。1934（昭和9）年、香川県美術展覧会創立推進の一人として活躍。

作品には、人間味のある純粋であたたかい情感が流れ、自由で、すんだ明るい世界を実現している。丸亀市猪熊弦一郎現代美術館に、多くの作品が展示されている。



『猪熊弦一郎の人間像 伯父の思い出』 坂口恭平/著 坂口恭平 2003



宇多津町より

大松博文 だいまつ ひろふみ 1921（大正10）～1978（昭和53）年 女子バレーボールを世界一に導く元全日本女子バレーボールの監督

綾歌郡宇多津町に生まれる。1964（昭和39）年の東京オリンピックで、日本女子バレーボールチームの監督として活躍した。当時の強豪ソビエト連邦（今のロシア共和国）を破り、国民待望の金メダルを獲得した。当時の日本チームは身長はもちろん攻撃力、守備力でも劣っていた。そこで、「回転レシーブ」を考え出し、スパイクを拾って拾いまくるという猛練習を行った。現役を退いてからは、全国の家婦人をはじめ中国、韓国など国際的な指導者としても活躍し、平成12年、世界のバレーボールの発展に寄与した功労者としてバレーボール殿堂入りを果たした。



『おれについてこい わたしの勝負根性 HOW TO BOOKS』 大松博文/著 講談社 1963.6
『なせばなる 続おれについてこい』 大松博文/著 講談社 1965.2

みずはら しげる
水原 茂

1909（明治42）～1982（昭和57）年 名三塁手から球界を代表する指揮官になった野球選手

高松市に生まれる。高松商業で投手，三塁手として甲子園優勝を果たした。慶応大学に進学し，卒業後巨人軍に入団。長年にわたり名三塁手としてプロ野球で活躍した。戦後巨人の監督に就任して，同軍の黄金時代を築き，また東映，中日の監督を歴任してチームを強化育成する。野球評論家としてプロ野球界の発展に貢献し，昭和52年野球殿堂人に入った。



（水原 茂） （三原 脩）
高松市中央公園



『野球王国・高松が生んだ宿命のライバル 水原茂と三原脩の野球人生 特別展』
高松市歴史資料館/編 高松市歴史資料館 1999.10

みはら おさむ
三原 脩

1911（明治44）～1984（昭和59）年 “魔術師” と呼ばれた名将 野球選手

仲多度郡神野村（今の満濃町）に生まれる。丸亀中学校（今の丸亀高等学校）から高松中学校（今の高松高等学校）に転校する。早稲田大学に進学し，卒業後巨人軍に入団。助監督を兼ねて草創期のプロ野球で活躍した。戦後，巨人，西鉄，大洋，近鉄，ヤクルトの監督を歴任，通算3248試合を指揮する。特に西鉄時代の三連覇，大洋の驚異的な日本制覇は有名。昭和49年には日本ハム球団社長に就任し，プロ野球の発展に尽くす。昭和58年野球殿堂入りした。



『魔術師 三原脩と西鉄ライオンズ』立石泰則/著 小学館 2002.11

◎他所から来て香川の発展に尽くした人々

政治の分野で活躍した人々



滝宮天満宮蔵

すがわらのみちざね

菅原道真

845（承和12）～903（延喜3）年 学問の神様 政治家・学者

天神様と呼ばれ，学問の神様として信仰されている。

886年（平安時代初期），国司として讃岐国に来た。道真の住まいは，讃岐国の中央にあたる綾歌郡綾南町滝宮の官舎（今は滝宮天満宮が建てられている）であった。讃岐の国内を詳しく見て周り，農民のくらしをよくするために力を尽くした。この年，讃岐国は日照りに悩まされており，池や川の水がことごとくかれたので，道真は，城山（坂出市）に一週間こもって雨乞いをし，見事に雨を降らせることに成功したと伝えられている。

書道や文学にすぐれ，府中（今の坂出市府中町）に学校を建て，役人や農民の子を集めて学問をさせた。

産業経済の分野で活躍した人々



三重県津市

にしじま はちべえ
西嶋八兵衛 1596（慶長1）～1680（延宝8）年 多くのため池を築いた讃岐の水の恩人 土木技術家

とうみのくに
 遠江国（今の静岡県）に生まれる。17才で伊勢国（今の三重県）津の藩主藤堂高虎に仕え、二条城や大阪城の修理などの仕事をして、土木技術を身に付けた。

日照りの害に苦しんでいた讃岐の藩主生駒高俊は、祖父の藤堂高虎に頼み、八兵衛を讃岐にまねいた。1624年から15年間、生駒高俊に仕えた八兵衛は、土木工事の面で多くの優れた仕事をした。満濃池の修理をはじめ、90余りのため池を築いた。また、高松に新田を開いたり、2筋に分かれていた香東川の流れを今のような1本の流れにするなど、八兵衛の功績は、今も香川県各地に残っており、讃岐の大恩人と言える。



『西嶋八兵衛と栗林公園 治水利水の先覚者』藤田勝重/著 大禹謨顕彰会 1962.11

やのべ へいろく
矢延平六 1610（慶長15）～1685（貞享2）年 伝説の主人公になった水利開発の功労者 水利・土木事業家

茨城県生まれ。22歳のとき、香川県にやってきた。大小あわせて数百ものため池を完成させ、香川県の農業の発展に大きな貢献をした。香東川の流れを引いて、浅野村（今の香川町）に新池を作った。ところが、必要以上に池を広げたとしてとがめられ藩を追放される。その後、高松藩に戻ることができ、晩年は富熊村（今の丸亀市綾歌町富熊）に住み、1685（貞享2）年に74歳でなくなる。このときの功績を称えた祭りが「ひょうげ祭り」となっている。